

「ハイッ お疲れ様〜!!」



「挑戦者氏〜？
なあんかやる気だけは
十分だったケドさ〜」



「そんなんじや全然バズれ：
いやいやっ、ボクには勝てないようっ」

ドマッ



「ま、そのジツリヨクで
挑んで来る度胸は凄いけどねっ!」

「またの挑戦を待ってるぞっ!」

「……ク……クソッ……!!」



「おやおや〜？挑戦者氏〜？」

「顔がこ・わ・い・ぞっ♡」

「そんな怖い顔してたらあ…
モテないぞ〜？」



「第一最初のジムにボクを選ぶつてのが
そもそもの間違いなんだからさあ〜」

「逆恨みはよしてよねっ!!」



「ほらほら、怖い顔せずに
さっさと帰った帰ったろ！」

「他の挑戦者氏もいるんだからさ〜？
ボクは忙しいんだよりっ」



「は、はい……」



(こ、コイツツツツ…!!)

(全然バトルに集中しねーどころか
途中でスマホいじってやがった…!)

(俺のことナメやがって…!!)

(許せねえ…!!)

(この生意気配信者…!!
マジでブチ犯してやりてえ…!!)



(で、でもいきなり
そんなことしたらやべーよな...)

(ど、どうしよら...)

(そ、そうだ...!)



「げ、何？急にニヤニヤしだして…」

「ほらほら!!さっさと帰つてよ!!」

「あ、はい…」



（お、覚えてろよ…！）



数時間後…

「はぁ、あ、
疲れたあ」



（……にしても今日のお昼に来た
オッサン、キモかったなあ）

（怒ったりニヤついたり…
何考えてるか分かんなかったし）

（第一あの歳でトレーナーデビューって…）



（ま、あんな厄介ファンが付くくらい
ボクも大人気になっただってことかな）

「……オイ」



「げ……さつきの挑戦者氏……？
なにになに……？ ストーカー……？」

「ケーサツのお世話に
なりたいの……？」



「…さつきはよくも配信中に
バカにしてくれたなあ…」

「おかげで色んな奴に笑われたよ…
お前んせいでなあ…」

「そ、それはキミが弱すぎるのが悪くない!!」

「何かする気なら本当にケーサツ…」



「るっせえ…!! いけ!! スリーパー!」

「わっ、なつなに!!
ここじゃジムバトル出来な…」

んん



「おらみんじゅい！」

「ふえ……？」

キイト…？♡



「お、お前は俺の肉便器になる…!!」

「……」

「いいなっ!!」



「はい…ボクはキミの…
肉便器…?…です…?…」

?

?

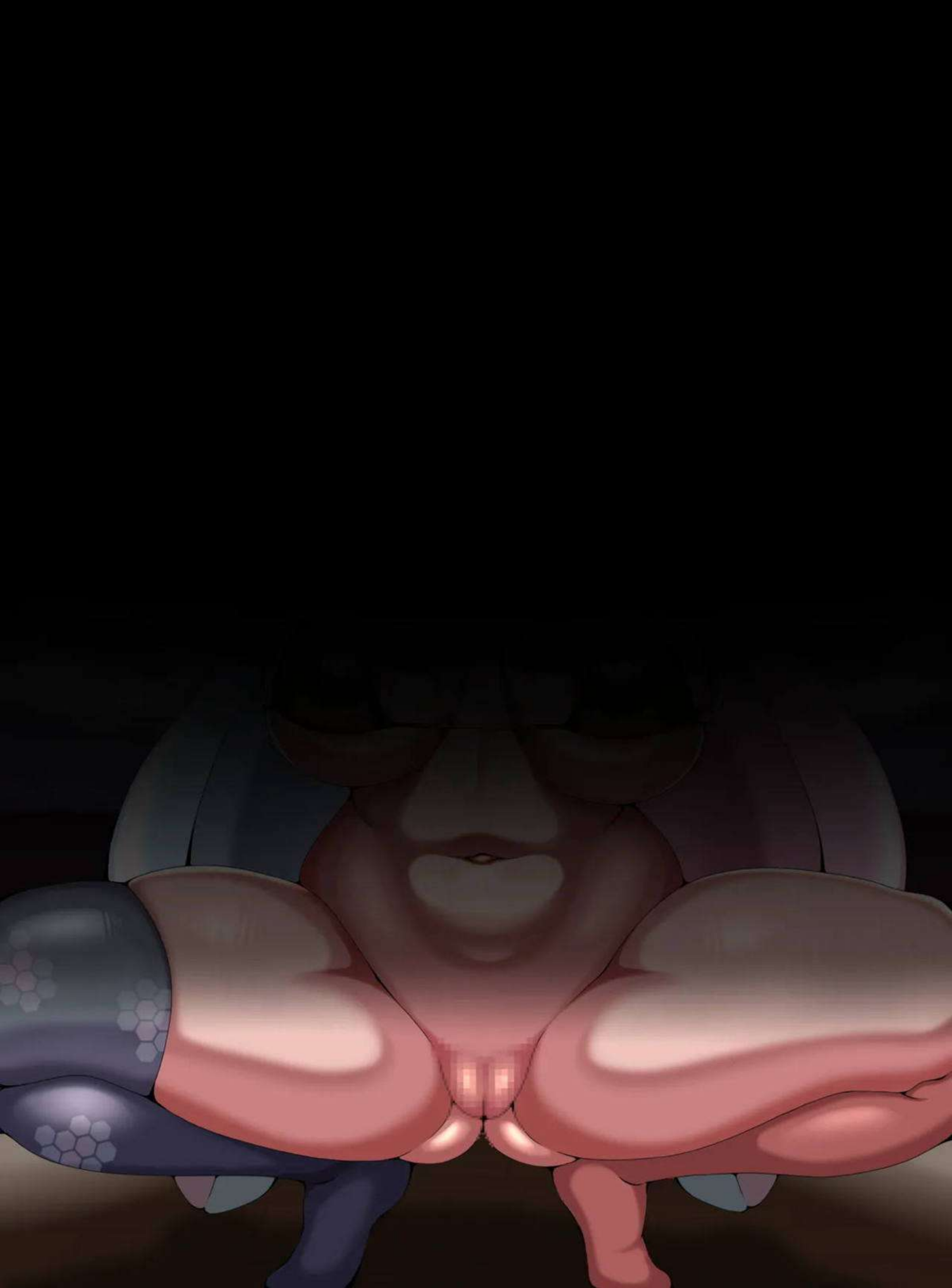




「うおっ…マジか…！マジかッッ！
これでコイツ…好き放題に出来るじゃん…！」

「へ…へへ…
たっぷり分かせてやるからな…！」





（んあ……あれ……?……どこ……?）

（さつき……変なオッサンに会ってから……?）

（あれ……
なんだつけ……?）



「ほくらナンジャモちゃん♡」

「そんな顔してないでさっ
配信見てる皆に挨拶しろよっ」



「ボクはご主人様の性奴隷の
ナンジャモでえゝす♡つてよ♡」



「はあ……？何言つてんの……？」

「ボクが……キミみたいなオッサンと……
そんなことするワケ……ない……？じゃん……」



「ちっ…まだ催眠の効きが悪いのか…」

「オラ、スリーパー
重ねがけで催眠術」





キーン...

ポーン...

「あう...?」

「ナンジャモは俺専用の肉便器になーる…」

「俺のお願いを全部聞き入れる…
この命令には逆らえない…」

「分かったか？」





「う……ん……」

「よしっ……もういいぞっスリーパー！」

「よし、じゃあ改めて…
ホラ!! 挨拶しろ!」



「……」



「みなのものゝ!!おはこんハロチャオゝ!!」

「あなたの目玉をエレキネット!!」

「なにもんじや!!
ナンジャモでえゝす!!」



「今日の生配信ではあ〜…
ボクのご主人様との
ガチハメセックスをお送りするぞ〜!!」

「画面の前の皆はあ
ボクとご主人様のラブラブセックスを見てえ…
たつくさんちんちんシコってっでね〜!」



「ふっふへへ……
思ったより催眠の効きがいいぞっ……！」

「あのナンジャモがこんな下品なことを言うなんて……」

(配信はしてねーけど……
このテンションの方がやっぱエロいなあ……♡)



「?……ご主人様どうした?」
早くセックスしようよ」

「おっ、おう……!! そうだなっ」



「て、てことで…」

俺がナンジャモのご主人様でえゝす」

「今からこのデカチンポで

ナンジャモとたくさん交尾していくぞゝ♡」

（あゝ…このシチュ燃えるわあ…♡

今度マジで配信しながらやってやろうかなあ…）



「ニヒヒ…てゅーいさで…！
初めてくぞいっ♡」







「はーっ♡はーっ♡」

「ご主人…やりすぎだよお…♡」



「わりいわりい♡」

「笑い物にされたのが
気に食わなくてよ」



「それはいつぱい謝ったじゃんかあ」

「ニヒヒ…でもお…
気持ちよかったから満足だぞ…っ♡」



「そっかそっか♡」

「それでナンジャモ…
俺はお前のなんだっけ？」



「?...ご主人様でしょ？
何言つてんのさ」

「おお、そうだったな♡」



(十分催眠も定着してるし
これはいい感じだな…)

(最高のおかずが出来たぜ…!!)

(次は何をしてやろうか…
本当に配信しながらでもいいな…!)



「ホラホラッ、そんなことどーでもいいからさ!!
早く続きしよーよ♡」

「ん? ああわーったわーった♡」



「よう……と」

「わっ、ご主人力つよっ……」

ガ

バッ♡

「ニヒヒ……早くそのデカチンポで
ズンズン突いて欲しいな♡」

「わーってるって、そう焦んなよ♡」



（……てゆーか、あれ……？
……よくよく見たらなんかデカくない……？）

ドキ
ドキ

（……こんなデカイの見たことないし……
なんか、やっぱおかしくない……？）



(いやいや…なんでボクこんなこと……)

(さっきも違和感感じた気がするけど…
やっぱおかしいよね…?)



「ね、ねえ……ご主人様……？やっぱやめ……」

「ふんっ♡」

イッ
チュッ!!



(なにこれなにこれなにこれっ…!?!?)

(こんな凄いの感じたことないっ…!!
やっぱなんかおかしい…っ!?!?)

!?

「ちっ、処女じゃねーのか…まあそうか」



「アイドル面して非処女とかありえねーな
オラツ、リスナーに謝れっ！」

くっ♡





「うっ…うるさいっ…!
こ、これ犯罪だからね…!!」
「ボクッ…許さないから…!!」



「…また催眠解けたのかよ…」
「スリーパー、追加で催眠」



ポッー...ッ

「あっ...」







「オラツ手間かけさせやがって！」

「謝れっ！非処女でごめんなさいって言え！」

ほおっ

グッ♡

ぬちゅ♡

ずちゅ♡

「ぐぐぐ...ぐぐぐなまぐらひ♡」

「処女じゃなくてえ...っ
ごめんなさいっ♡」



「謝らせるの優越感
そそられる〜っ…」

「あーっ精液くるくるくるくる…っ♡」

ググググ…



「ぶっ濃いの出してやるからなあっ♡」

「ふあっふあいつ♡」

パ
ン
パ
ン
♡
♡

ん
ん

「ご主人様あつ♡
濃いの出して欲しいっですっ♡」





「わかったよっ…！
じゃあ濃いの出してやるからなあっ…！」

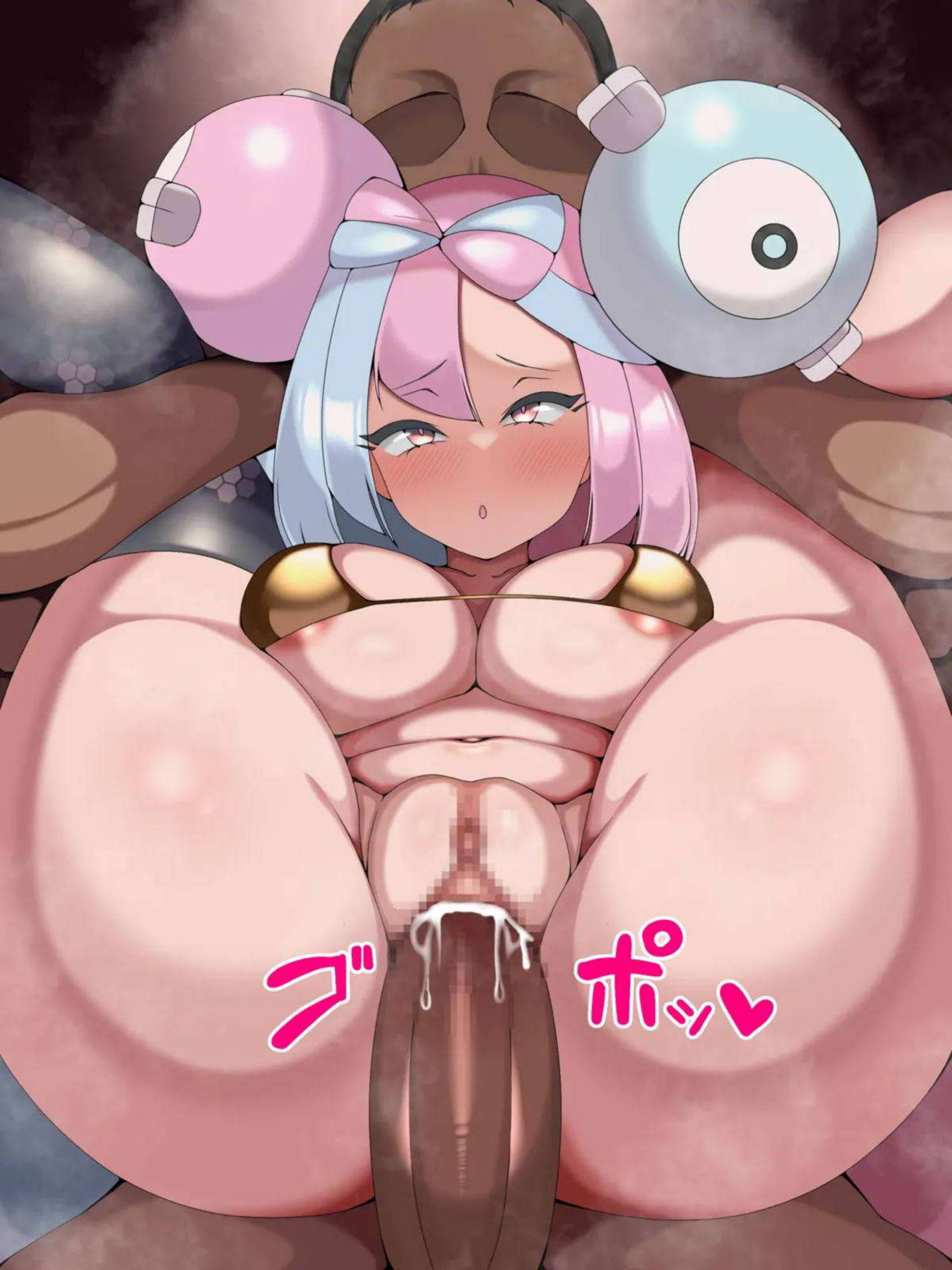
「出るっ…!!」

おっ♡

ズ♡

ターッ♡





グ

ポッ♡



エ

♡+□

「はあ…はあ…っ♡
お前は俺の肉便器なんだ…」

「わかったな…?」





「ふぁ……ふぁ……♡」